



ピタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 13 号

発行日 2018 年 4 月 1 日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩 7-1-29-305

桜のたより

弥生の雨

北国ではまだ桜は冬衣

ひと足早くとどいたのは

「桜のたより」*

枝先にかたい蕾と

八分咲きの薄紅色の花

「久方の光のどけき…」の歌も
描かれている

春の器に

ちりばめられた花びらに

やわらかな光が降りそそいでいる

桜の色にさそわれて

部屋のなかに

春がみちる

* 「えびせんべい」の名前

濁黒（KURO） II

*

綴れ織りの

分厚い闇魔帳に折りたたまれた

わたしの人生が

滑るような速度で

めくられていく

鮮明な影像の

不可思議な静寂

最後に

母の胎内のわたしが

透明な袋に入って

あわい乳白色の海に漂っていた

*

これから

わたしの身に

なにが起こるのかを知っていたのか

あの日

ファックスの用紙が

三途の川のように

白い川となって

床に長く垂れていた

*

ブラックホールのふかい穴に
わたしは落ちてしまった

光をのみこんだ闇は

瞬時に

時を凍らせ

見ようとしても見えず

聞こうとしても聞こえない

みずからの重さで崩壊する

魂

疲弊したからだが崩れ

指先から

溶けていく

そのとき

わたしは

虚

*

過労だよ

エラそうなヒトがいう

偽名は

薄っぺらのからだを踵で踏みつけ

大手をふってまかり通る

財力、地位、権力が威勢をふるい

防御力のないわたしを圧さえつける

閉じられた時間の裂け目から

流動するアメーバのような

どす黒い液体がしたたり落ちる

汚さ、醜さ、卑怯に

拒否できない沈黙の心……

＊

(もう二度と来ないわ

矯激な言葉を吐いて

病室を出ていったヒトの

負の贈りもの

棘だつ言葉の

棘が突き刺さり

痛い

魂の裂け目から

瞬時に滲みでる

血

＊

そのうち

孫悟空の頭の緊箍児きんこじのように

黒い塊が頭に被さり

締めつけるようになった

はめられた箍は

肉に食いこんで根が生えたよう

わたしの感情は凝固し

支配されているような感覚に

襲われるようになった

筋肉が落ち

心も萎え

逃げおおせるだけの力もない

わたしは

青白くか細い枯れ枝のような

軀になつてしまった

*

精神は闇に翻弄され
いちど絡まった精神の糸は
簡単には解けず
解決の分岐点は
ますます遠のいていった

*

水戸黄門の印籠のような
はつきりと見える証がほしい
証拠さえあれば
恐れ入りましたと
ひれ伏すだろうに――

*

幾度となく
否応なしに
かかってくる外線
病院の長い廊下を
手すりにつかまり
やっと
電話口へ

偽政者になりたいヒトの
一番の関心事は
世間の口

（あんた 電話したでしよう！
一方的にまくしたてる相手
ナースステーションの前で
しゃがみ込むわたし

違う！

内面で

石の心が

叫ぶ

わたしの傷んだ心からだ身から

悲鳴がきこえる

また

意識を失う……

*

ひとは

出口のない

暗闇に追いつめられたとき

みずからを追いつめる

内側からの声に

背を向け

外側からの声に

怒りのようなものを抱く

（がんばって！

なにをがんばるの

こんなに頑張っているのに――

最初に失うのは

食べる本能

最初に断ち切られるのは

安易な希望

最初に取りこまれるのは

翼ある闇

*

死ぬって簡単だ

生きることをやめればいい

死ぬ方法だけ考えればいいんだ
でも

みずからは死ねなかった

生きるって難しいよ

*

わたしを蝕んだ

不条理は

どんどん肥大する

意味のない白い時だけが

積みかさなっていく

*

苦しみでうずくまるわたしを余所に

血脈の渦がまき

感情が断絶する

*

いろんな人が近づいてくる

売れる情報をつかみにくる人

魂の救済や永劫の輪廻を説き

恐怖をかきたてる人

思わぬ方向に解決を誘導する教師

狙った獲物のがさない

腐肉を喰い

不幸を嗅ぎつける

人のかたちのハイエナたち

＊

冷たさの漂うなか
遠くから

親友夫妻がお見舞いに――

孤独の病室に

明るくおおらかな風が

カーテンをやさしくかきわけ入ってくる

目には見えない

あたたかいものが

魂には見える

わたしはひとり

ではない！

＊

現場検証もしないうちに
修繕された忌まわしい建物で
安全性が証明されたと

専門機関の

無慈悲な報告書がとどく

（それはないだろう！）

医師の憤怒の声

でつちあげられた証拠が

まかり通る現実

真実は浮遊し

積みあげられる虚偽

＊

わたしの

廃墟な

隆起の丘に根づいた

搔痒の薔薇が

深い嘆きと絶望で

赤から黒へ

変色しだした

*

思惑が蠢く

病院の四角い器の中で

自虐的な日々を送っていた

そんなある日

ひとりの医師と出会った

(あなたにはなれないが

分かるうとすることはできる

この言葉の一滴が

心の隅々まで浸透した

身を託せる医師と

やつと巡りあい

精神を入れかえる場所を

わたしは手に入れた

*

事故は

たったひとり

わたしだけだった

ゆえに

真実が通らない

冤罪のような苦しみ

狂えなかった

地獄

糧を支給しない

仕送りもできない

兵糧攻めの生活

惨めさの一つひとつを

医師はのみ込んでくれた

死の誘惑に負ける

ところだった

＊

闘う

ベッドの暗翳が漂うなかに

どんなに

黒い記憶の波に打たれつづけられようが

闘う

わたしがわたしであるために

証人はいない

が

闘う

みずからを救うために

生きること

を

闘う

この途しか
残されていない

＊

（ここにはダメだ！

真実が通らない

針の孔の光さえもみえない

闇黒の世界から

言葉に偽りのない世界へ

医師を信じて

転院

徒然のエチュード
XI

1

みなさん！

豆炭

練炭

備長炭

親炭

2

いまなに読んでるの？

一茶だよ

お猿さんの？

♪イッサ イッサ

イッサホイッサッサ

3

素敵なことをやっている

心の豊かな人を

セレブと呼びます

じゃ 詩作中のわたしは

セレブね

でも、ことばは貧しい！

4

遺影に飾られた

フロックスの花

落下の間際に

母に助けを求めるように

花の糸をたれて……

薄桃色の香りは

母のにおい

5

厚化粧をやめ

スッピンテカ顔

素肌美人の時代がきています

わたしの時代は

いつくる？

6

日本大使館をスキャンしたら

日本大使館になった

アタマの○○な

スキャナー！

7

寝る子は

育つ

寝る矢代は

横に育つ

【あとがき】

なにかに取りつかれたように「濁黒」を書きすすめているが、書くことで、わたしはもう一度濁黒に襲われている。からだの中から濁黒を出しきることなどできるのだろうか。書き終わった後に、わたしはどうなっているのかなど、容赦なく不安の波が押しよせる。

だが、決心したからには書くしかない。詩でストリートに表現することが、まだできないでいる。読者にはもやもや感が残るかもしれないが、しかし、いまはこのまま書きつづけていこうと考えている。

*

次回の「ピッタの会」は、九月に予定しております。

